



豊原国周《里見八犬士之内 犬坂毛野》慶応元年（1865）

Topics

八犬伝の世界

国立美術館所蔵による 20世紀の写真

ナンバーズ・数をめぐって

八犬伝の世界

「八犬伝」といえば、まず思い出されるのがNHKの人形劇『新八犬伝』(昭和48-50年)である。筆者にとっては小学生時代、夕食前の時間にかかなりの確率で見ていたのがこの番組であった。歌手の坂本九さんの語りの名調子と歌、台詞としては「^{たますき}玉梓がお〜んりょう〜」が耳について忘れられない。振り絞るような言い方の「お〜んりょう〜」が怨霊だというのは結構後に知ったものの、おどろおどろしくて恐かった。物語は少しわかりにくかったが、そのおどろおどろしさも含め、子どもの見るものとしては他にはない感覚の物語だったので、楽しい番組の一つになっていた。

同様に曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』を原作までは読んでいなくても、この人形劇の番組や、あるいは現代の演劇、漫画などで「八犬伝」に親しんだ方は多いことであろう。そしてまさにそこに「八犬伝」の特徴と凄さがあるように思えてならない。

「八犬伝の世界」展は、江戸時代末期に成立した曲亭馬琴作の読本『南総里見八犬伝』から、浮世絵や歌舞伎によって「八犬伝」が普及され、現代に伝えられたその様子を250点ほどの作品によって見ていただくという展覧会で、原典だけを追いかけるのではなく、むしろ「八犬伝」が普及されていく様相が明らかにされていく。原典を理解しなければという前提はなく、長い物語の中で、享受者がどの登場人物を、そしてどのシーンを選んで身近な楽しみとしてきたのかを中心に、見ていただくという内容である。



二代目歌川国貞《八犬傳犬之草紙酒内 神餘妾玉梓》
大判錦絵 嘉永5年(1852) 服部仁氏蔵



歌川国芳《(円塚山 道節火遁の術) 犬山道節 犬川莊助》
大判錦絵2枚続 嘉永5年(1852) 鈴木重三氏蔵

伏姫の数珠から飛び散った「仁」「義」「礼」「智」「忠」「信」「孝」「悌」の文字が浮かび上がる8つの玉を持つ八犬士は、不思議な霊力に導かれ、出会い、物語の後半で遂に8人が揃い、里見氏のために最強の活躍をする。奇想天外な発想と、超常現象や霊能力が渦巻く世界は、現代のどのようなハイパーなキャラクターや映画のストーリーにも負けてはいない。殊に現代においては、複雑さと面白さは両立し難いものであるが、物語や登場人物の複雑さゆえに、ついマニアックにはまってしまう深い面白さもある。またその複雑さの一方で、勧善懲悪の倫理観はかなり明快で、善を代表するのが伏姫であり、悪を代表するのが玉梓という二人の女を代表させて対立世界を描く手法も面白い。そして浮世絵や歌舞伎は、この物語から選りすぐりの魅力的なシーンを表わしてきたのである。

展示の流れを少し紹介させていただくと、まず最初のコーナーは『南総里見八犬伝』の誕生と曲亭馬琴で、原典の読本と、馬琴その人にスポットを当てる。病苦や家族の不幸、失明など、様々な苦難を乗り越えながら、この読本は文化11年(1814)から天保13年(1842)に至るまで、実に約29年間106冊にわたって出版され続ける。当初からスケールの大きな構想があり、後半の執拗な書きぶりには、物語を完結させるための執念さえ感じられるのだが、結局浮世絵などで主に扱われるのは八犬士が揃うまでであった。またとびきり長い物語で、古典の知識なども盛り込んだ原典は、やや難解なところもあり、馬琴生存中から『雪梅芳譚 犬の草紙』、『仮名読八犬伝』などのダイジェスト版が出版され、「八犬伝」の普及に大きな役割を果たしていることも注目されるであろう。

その『雪梅芳譚 犬の草紙』の登場人物を1人ずつ大首絵(顔を大きく描く錦絵の形式)に描き出した大判錦絵のシリーズを展示する「錦絵『犬の草紙』に見る八犬伝の登場人物たち」が次のコーナー。嘉永5年(1852)に版行された50人50図のシリーズは、並べてみると壮観で、ここでは登場人物に親しんでいただきたいと同時に、物語の複雑さや長さを感じていただくという展示でもある。

次は「八犬伝の名シーン」というコーナーで、有名シーンベスト3を中心に展覧する。まず何と言っても犬塚信乃と犬飼現八の芳流閣での闘い、次には犬山道節が火遁の術を用いる円塚山、そして3番手としては女田楽に姿を変えた犬坂毛野が仇を討つ対牛楼のシーンであり、芳流閣や対牛楼などは、活劇的なすかつとした勇壮な場面である。

八犬士の活躍は、次のコーナー「八犬士が揃う」でより一層理解が深まるであろう。しばしば浮世絵で八犬士の絵は、8枚のセットとして制作された。八犬士を揃えて鑑賞することで一層魅力が増してくる。ちなみにちらしやポスターでも使っている豊原国周の《八犬士之内 犬坂毛野》(表紙参照)も8枚揃いの1図で、対牛楼の仇討ちの場面の、女装の毛野が何ともかっこいい。

次は「八犬伝を熱演する役者たち」。「八犬伝」の錦絵は、実は役者絵である場合が多い。実際の舞台に取材する場合ももちろんあるが、個性的な登場人物に、その役にふさわしい役者の似顔を当てはめてイメージする楽しみのために描かれた作品も多かった。天保の改革

により、天保(1830-44)末期には、役者絵は風紀上好ましくないものとされて表現が抑制された時期もあったが、庶民のパワーはまもなく役者絵らしい役者絵を復活させている。

そして「八犬伝に遊ぶ」。「八犬伝」は遊びの中でも普及した。双六、判じ絵、立版古、凧に至るまで、大人から子どもまでが八犬伝に遊んだのである。遊び心のある作品から、様々に楽しまれたその世界の広がりを感じてみたい。

最後のコーナーは、「八犬伝、現代に生きる一進化するイメージ」で、近代の日本画、明治以降現在まで出版物や、それこそ筆者にはなつかしいNHKの人形劇『新八犬伝』で遣われた犬塚信乃の人形をはじめ、現代の歌舞伎、映画などの資料が並び、現代に至るまで「八犬伝」が様々な文化の素材となっている様子がいきいきと実感されることだろう。

安房の国が発端の地となる「八犬伝」は、房総にゆかり深い物語でもある。馬琴は生前房総には行ったことがなかったというが、そのイメージは多分に視覚的でありリアリティーさえある。馬琴は特に視力が衰える前には、自ら描いた詳細な下絵を絵師に渡して挿絵の指示をしていた。馬琴にとって文章と絵は一体となって物語を構成するものだったのである。そして八犬伝のイメージは確実に後世に受け継がれ、驚くほどに広がりを見せた。この展覧会を機に、一層多くの方々が八犬伝世界のイメージをふくらませていただければと思う。

[主任学芸員 田辺昌子]



歌川国芳《八犬傳之内芳流閣》大判錦絵3枚続 天保11年(1840) 服部仁氏蔵



三代目歌川豊国《大(対)牛楼 犬坂朝毛乃 犬田小文吾》大判錦絵2枚続 嘉永5年(1852) 服部仁氏蔵

関連イベント

■監修者による講演会

『「八犬伝」と浮世絵と』

9月15日(月・祝) 14:00～

講師：服部 仁(同朋大学教授)

会場：11階講堂 先着150人

■講演会

「八犬伝の世界」

9月20日(土) 14:00～

講師：町田 達彦(館山市立博物館 主任学芸員)

会場：11階講堂 先着150人

■ワークショップ(事前申込制)

伝統の駿河凧作り「八犬伝のヒーローを描く」

凧を作り、犬山道節、犬塚信乃など「八犬伝」のヒーローを描きます。

・Aグループ 10月4日(土) 13:30～

・Bグループ 10月5日(日) 13:30～

講師：駿河凧・凧八五代目 後藤光

会場：さや堂ホール 各回定員20人

*両日とも内容は同じです。

*完成までに3-4時間かかります。

*当日材料費として900円をいただきます。

*小学校3年生以下の児童には保護者の付添が必要です。

[申込方法] 往復葉書に住所、氏名、電話番号、希望する日をお書きの上、

〒260-8733千葉市美術館「八犬伝」係までお送りください。

(9月22日締切。当日消印有効)

■劇団員の火によるお話と人形遣い体験(展覧会場内・予約不要)

「八犬伝の人形をつかってみよう」

八犬伝の人形に触れたりビデオを見ながら、楽しく「八犬伝」への理解を深めます。

小中学生の参加歓迎。NHK番組「新八犬伝」(1973-75年)の人形遣いとしても活躍

された伊東万里子さん主宰の人形劇団員の火メンバーによるワークショップ。

会期中10月の土曜日・日曜日

時間：土曜 14:00～と16:00～の2回

日曜：14:00～ *各回40分間程度

会場：7階展示室内(受付は8階)、参加自由

*小中学生は無料。一般、大学・高校生は「八犬伝の世界」展入場チケットが必要です。

*会期中、川本喜八郎氏による八犬伝の人形(劇団員の火所蔵)の特別展示もあります。

■ギャラリートーク

担当学芸員によるギャラリートーク

9月17日(水) 14:00～

ボランティアによるギャラリートーク

会期中の毎週水曜日 14:00～(9月17日を除く)



辻村ジュサブルー
《NHK『新八犬伝』人形 犬塚信乃》
館山市立博物館蔵 協力：ジュサブルー館

八犬伝の世界

2008年9月13日(土)▷10月26日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(10月6日)

[観覧料] 一般 1,000(800)円

高校・大学生 700(560)円

小・中学生 無料

*()内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の

窓口(10月26日まで)にて販売

*10月18日(土)、10月19日(日)は「市民の日」につき無料開放

国立美術館所蔵による

20世紀の写真

20th Century Photography

芸術になった写真

19世紀初頭に写真術が発明されて以来、写真は短期間のうちに世界中に広まっていきました。肖像写真や風景写真をはじめ、世紀の終わりには、写真は人々の暮らしになくてはならない身近な存在となりました。けれどもそれらの写真はあくまで実用的な記録媒体とみなされ、当時はまだ芸術として公認されてはいなかったのです。世紀の終わりにはピクトリアリズムと呼ばれる写真芸術運動も起こりましたが、その多くは絵画の構図や描法の模倣に留まっていました。このような状況を打破し、写真技法の特色を生かした芸術性の高い写真を確立しようとしたのが、アメリカの写真家アルフレッド・スティーグリッツです。彼は「フォト・セセッション」(写真分離派)というグループの結成、「ギャラリー 291」の運営、雑誌『カメラ・ワーク』の発行などの活動を通して、写真を独立した芸術分野にまで高めることに生涯を費やしました。彼の最晩年の1940年になってようやく、ニューヨーク近代美術館に写真部門が創設され、その後世界中の美術館が、芸術という視点のもと写真を収集するようになりました。19世紀初頭に生まれた写真でしたが、20世紀になって初めて、芸術の一分野として広く認められるようになったのです。絵画や彫刻に比べるとはるかに新しい写真ですが、美術の世界でもまだまだ新参者なのです。

日本でも、写真を収集する美術館が1980年代頃から少しずつ増えてきました。特にこの「20世紀の写真」展に作品をお貸しいただく国立の3美術館は、はやくからそれぞれの館の個性を生かした写真コレクションを形成してきました。京都国立近代美術館は、1986年、シカゴのアーノルド・ギルバート夫妻が収集した大規模な写真コレクション(1,050点)の寄贈を受けるとともに、近年は遺族が所蔵するユージン・スミスの写真コレクションを購入し続けています。東京国立近代美術館は、国内外の代表的な写真家の代表作を数多く所蔵し、国内有数の写真コレクションを形成してきました。国立国際美術館も、現代アートと関連する写真を中心に、特徴ある収集を続けています。「20世紀の写真」展は、これら3美術館の傑出したコレクションに千葉市美術館所蔵の作品を若干加え、今世紀の芸術写真の流れをわかりやすく紹介する展覧会です。

20世紀写真の3つの傾向

言うまでもなく、写真の表現方法や社会的な役割は実に多種多様です。今回の展覧会は、芸術というフィルターを通してそれらを絞っ



図1 アルフレッド・スティーグリッツ《ターミナル》1892年
京都国立近代美術館蔵



図2 ポール・ストランド《フォトグラフ》1915年
京都国立近代美術館蔵



図3 マン・レイ《アングルのヴァイオリン》1924年
京都国立近代美術館蔵
© MAN RAY TRUST / ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2008

ていますが、それでもその範囲は決して狭くありません。そこでこの章では、主に写真家の被写体に向かう姿勢と技法的な特徴によって、20世紀写真芸術の3つの傾向を挙げたいと思います。展覧会をご覧になる際のお役にたてばと思います。

ひとつめは先程紹介したスティエグリッツが提唱した「ストレート・フォトグラフィー」の系譜に属する写真です。彼は、絵画を模倣してわざとらしい演出を行なった19世紀末のピクトリアリズムに対抗して、現実をありのままに(ストレートに)写し撮るという写真本来のあり方を推奨しました(図1)。そのためストレート・フォトグラフィーの写真家は、被写体に手を加えたり、撮影した写真をトリミングしたり、修正したりすることを嫌ったのです。その後スティエグリッツの教えを受けたポール・ストランド(図2)や、エドワード・ウェストン、イモジェン・カニンガム、アンセル・アダムスら「f.64」グループの写真家たちは、被写体を予想外の角度から撮影したり、極端なクローズアップで撮影したりすることで、身の回りの平凡な事物を不思議なイメージへと昇華させました。彼らアメリカの写真家によって、ストレート・フォトグラフィーの理念は、高い芸術性のもと、ひとつの完成をみたのでした。その後も被写体をありのままに正面から写し撮る芸術写真の系統は、現在に至るまで続いています。

2つ目の傾向として、ヨーロッパを中心に起こったアヴァンギャルドの実験的な写真の流れを挙げたいと思います。マン・レイ、アレクサンドル・ロドチェンコ、ラーズロ・モホイ＝ナジをはじめ、1920年代に活躍したアヴァンギャルドの写真家のなかには、写真よりも絵画や彫刻を中心に制作活動を行っていたアーティストがたくさん含まれています。キュビズムや抽象絵画に代表されるように、当時の絵画や彫刻は、現実を忠実に写し取るのではなく、現実の世界とは全く異なる誰も見た事もない光景を作り上げました。アヴァンギャルドの写真家も、現実にはありえない驚異的なイメージを写真でつくろうとしました。彼らは被写体自体を自ら構成するとともに、時としてフォトグラムやソラリゼーションなどの特殊な技法を使って、前衛的な写真を撮りました。例えばマン・レイの《アングルのヴァイオリン》(図3)は、ヌードの女性の後ろ姿をヴァイオリンに見立てた作品ですが、まるでシュールレアリスムの絵画を思わせるような不思議でユーモラスな作品です。20世紀を通して、作家自身が被写体を作り上げたり、特殊な撮影方法を使ったりしてインパクトのあるイメージを生み出す写真の伝統は強く生き続けました。

最後の3つ目が、多くの方々にとって最も馴染み深いであろう、ドキュメンタリー写真の分野です。失われつつあった古いパリの街並を写真で保存したアジェのような先駆者も忘れる事はできませんが(図4)、この分野の全盛期は1930年代から50年代くらいまでの時期です。20世紀、多くの人々に愛用された35mmフィルム・カメラの元祖ライカが市販されたのが1925年ですが、ちょうどこの軽量で扱い易いカメラの発売に続くように、フォト・ジャーナリズムが世界中で隆盛を迎えました。「ライフ」などのグラフ誌が飛ぶように売れ、「決定的瞬間」を求めて写真家たちが世界中を駆け巡りまし

た。例えばロバート・キャパが写した銃弾に倒れる瞬間の兵士などは、まさに見事なまでの「決定的瞬間」と言えるのではないのでしょうか(図5)。現実をありのままに撮るという点では、ドキュメンタリー写真はストレート・フォトグラフィーと変わりません。ただドキュメンタリー写真は、現実の出来事を伝えるという社会的な役割を担っているところが、純粋な芸術表現としてかたちの美しさを追求するストレート写真とは異なります。確かにドキュメンタリー写真はメッセージ性が重視される実用的な分野ではありますが、美術館は、そのなかで芸術性の高いものを厳選してコレクションに加えてきたのです。

[学芸員 水沼啓和]



図4 ウジェーヌ・アジェ《大道芸人》1898-99年
東京国立近代美術館蔵



図5 ロバート・キャパ《スペイン(共和軍兵士の死)》1936年
京都国立近代美術館蔵 Robert Capa © 2001 By Cornell Capa / Magnum Photos

国立美術館所蔵による 20世紀の写真

2008年11月1日(土)▷12月14日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

【休館日】 11月4日(火)、12月1日(月)、12月7日(日)

【観覧料】 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

*前売券は、千葉市美術館ミュージアムショップ(10月26日まで)、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(12月14日まで)にて販売

ナンバーズ・数をめぐって

企画展「八犬伝の世界」と時期を同じくして開催する所蔵作品展は、その名も「ナンバーズ」。八犬士たちが紆余曲折を経てついには八人揃って活躍する長大なストーリー展開をはじめ、そこに複雑に張り巡らされた伏線のなかにも、さらにはストーリーから派生した錦絵などの造形においても、数が揃い、数をあわせることにこだわる「八犬伝」にちなもうという企画で、所蔵作品のなかから、江戸時代から現代まで数にまつわる作品のさまざまを展示いたします。

「三筆」「四天王」「七福神」など、同類のものをいくつかまとめ、一定の決まった数を添えて呼ぶ名称のことを「名数」といいます。名数が揃うことを素朴によるこび、心地よく思う気持ちは古今変わりがありません。浮世絵などの特に版画に「揃物」が多いのは、この心性を利用した販売戦略という要素も大きいのでしうし、版画の多くは本来「揃物」であったことを前提に見たりその上での趣向を考えた方がよいのですが、そのようにシリーズで刊行する際に名数は重要な編成要素となり、数字を含む名数題材は特に好まれました。八犬士などはまさに揃物にうってつけの題材です。「仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌」は「八徳」。日本では「八」は末広がりといわれ、吉祥の数字とされています。「八景」「八態」「八種」などと、「八」を揃えた



伊東深水《近江八景の内 唐崎の松》大正7年(1918)
千葉市美術館蔵

「八犬伝の世界」番外編をまずはお楽しみください。企画展には不出品の当館所蔵・寄託の「八犬伝」関連浮世絵も少数ですがあわせて展示します。

現在では「名数」という語自体が耳慣れないものとなっているように、古来大切にされた名数の中にも、現代では何を揃えたのか馴染みが薄くなっている内容があります。また、作品の中に示された「数」の意味が分からなくなっているケースも大いにあり得るでしょう。そこで、「八犬伝」展にお越しの皆様には簡単な内容となるかもしれませんが、作品の中に「数」探しが楽しめるようなコーナーも設けてみたいと思います。

「八」はまた、八十神(やそがみ)、八百万(やおよろず)、八千代(やちよ)など、たくさんの数を表す聖なる数字ともされましたが、その意味では「百」「千」「万」も、具体的な数量だけではなく、多数とか多種多様を表す数詞です。これらの文字を借りた、「もの尽くし」の世界もご観いただきましょう。

このほかに、「数」によって「時」の概念を表現したといえる作品も展示の予定です。もちろん、「数」のとらえ方によって、まだまだもっと多様に「数」と美術の関わりを指摘できることでしょう。さまざまな美術の見方のひとつのきっかけとしてお楽しみいただければ幸いです。

[学芸員 松尾知子]



大原東野『名数画譜』文化7年(1810)刊 千葉市美術館蔵(ラヴィッツコレクション)



岡田米山人《竹林七賢図》文化5年(1808) 千葉市美術館蔵

ナンバーズ・数をめぐって

2008年9月13日(土)▷10月26日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 第1月曜日(10月6日)

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

* ()内は前売、団体30人以上および市内在住60歳以上の料金

* 10月18日(土)、10月19日(日)は「市民の日」につき無料開放

* 同時開催「八犬伝の世界」展のチケットをお持ちの方は無料

岡山県立美術館との交換展

「千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展」
「牧谿・雪舟と和漢の水墨画—岡山県立美術館所蔵水墨画名品展(仮称)」



「千葉市美術館所蔵浮世絵の美展」チラシ

宮本武蔵「布袋竹雀枯木翡翠図」より《枯木翡翠図》

7月18日から8月24日まで、岡山県立美術館で「千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展」が開かれ、会期中45,460人の来観者がありました。この展覧会は、当館の浮世絵コレクションから一部寄託品を含む210点を岡山県立美術館が選んで企画したものです。当館でも名品と自負する作品で浮世絵の流れをたどるのに加え、津山藩御用絵師を務めた岡山ゆかりの画家鍛形蕙斎(北尾政美)に注目したり、寄託品の青木コレクションに含まれる楽しいおもちゃ絵を取り上げたりと、浮世絵展としてオーソドックスな部分と新しい試みとのバランスがとれた構成で、所蔵品の新たな魅力を引き出していただきました。

その交換展として12月20日から1月25日まで今度は「牧谿・雪舟と和漢の水墨画—岡山県立美術館所蔵水墨画名品展(仮称)」を開催します。日本の水墨画の巨匠雪舟が岡山出身であることから、岡山県立美術館は水墨画に力を入れた一大コレクションを形成してきました。中国宋代の牧谿、室町時代の雪舟、戦国時代の宮本武蔵らの名品を堪能していただくのはもちろんのこと、岡山から京都へ出て活躍した四条派の画家、柴田義董と岡本豊彦にスポットをあてたり、江戸時代の中国愛好を示す^{からえ}唐画の系譜を浦上玉堂から明治時代の富岡鉄斎らの作品でたどったり、多面的な展覧会を目指して鋭意準備中です。どうぞご期待ください。

ボランティア日和 episode17

美術館ボランティアの楽しみとは何でしょう。それは展覧会の趣旨や作品の解説を学芸員のみなさんからじっくりお聞きできること、作品を身近に繰り返し観ることができること、作品や作家やその時代に思いを馳せながら本や図録で学ぶこと、小さな発見や疑問を解いていくこと、そして自分なりに咀嚼して来館者に伝え、楽しみの共有に腐心すること、かもしれません。またワークショップなどで多くの子供たちの笑顔に出会えることや、ボランティア仲間との語りなど、楽しみはつきません。

そう例えば、鳥居清長展。江戸のヴィーナスに魅了されながら、その背景として描かれた名所や風景を「江戸切絵図」や「東京区分地図」に探し求めると、日本橋・両国・浅草・深川などの昔と今が、少し見えてくるような気がしてきます。また江戸期の政治や文化だけでなく、隅田川の幾度も洪水や氷結のことを知ると、中洲のことや子供たちの雪遊びの情景がより現実味を帯びて空気まで蘇ってきます。そしてその時代そこに生きた絵中の美女や様々な人々がざわめくように動き出し、思わず自分も渦中の一人のような、そんな幻想におそわれます。

例えば、追善浮世絵(死絵)展。8代目団十郎の死絵の不思議さにふと気づくと、彼の信条や信教や時代のことが、随分気になってきます。また例えば池田満寿夫展。熱海が単に温泉観光地としてではなく、深夜に彼が玄関先で倒れたアトリエのある熱海として、より広がってきます。

専門家にとってはごく当たり前のことや取るに足らないことも、私には新鮮な驚きで、作品の素晴らしさに加えて時代時代の人々の営みが実に興味深く、また楽しくなってきます。そして会話が野卑や下世話に陥らないよう気配りしながら、時に野次馬庶民の感覚で来館者と共に作品を楽しく鑑賞できないだろうかと思っています。無論「嘘は言わない」を肝に命じて。

さて地方財政の現状から、多くの公立美術館が様々な工夫と努力を重ねていると聞きます。そんな中で、美術館と市民を結ぶ架け橋のような役割を、微力ながら市民の目線で果たしていければ、それが一番の喜びかもしれません。

〔美術館ボランティア 小川正治〕

◎「インドネシア更紗のすべて」展の関連イベント、ぞくぞく開催。

去る7月21日に終了した「インドネシア更紗のすべて—伝統と融合の芸術」展は、展覧会自体も大好評でしたが、ユニークなイベントを数多く開催したことで注目を集めました。インドネシア更紗を用いたファッションとガムランを素材とするデジタル・ミュージックによる 玉川大学芸術学部ミュージアム・プロジェクトのビジュアル・アート・ショー(6月8日)や、舞踊グループ「デワンダル」によるジャワ舞踊(6月28日)に加え、インドネシア更紗を実際に試着出来る「パティック試着会」も会期中5回開かれました。またお気に入りの布を使って、日本伝統の包み布や敷き布をつくる「袱紗講習会」も6月22日と7月6日の両日開かれました。



ビジュアル・アート・ショー



ジャワ舞踊

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は「江戸時代」をテーマとして、当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

【時 間】 14：00より(開場は30分前)

【場 所】 11階講堂

【定 員】 先着150人(入場無料)

- 第5回 9月27日(土) 「ナンバーズ
—江戸時代絵画と数をめぐって」
【講師】 松尾知子(本館学芸員)
- 第6回 10月13日(月・祝) 「八犬伝とその時代—幕末の錦絵」
【講師】 田辺昌子(本館主任学芸員)
- 第7回 11月8日(土) 「江戸の『写真』」
【講師】 小林忠(本館館長)
- 第8回 12月13日(土) 「光悦をめぐって」
【講師】 藁科英也(本館学芸係長)

◎過去の図録の一部の割引販売を始めました。

2008年4月より、一部の図録について割引販売を行っています。今も資料的価値を失っていない、当館自慢の図録が、当初の価格の1割-3割引きでお求めいただけます。詳しくはホームページの展覧会カタログ一覧をご覧ください、ミュージアムショップに直接お問い合わせ下さい。

ホームページのアドレス：

http://www.ccma-net.jp/publication_01_year.html

千葉市美術館ミュージアムショップ：

TEL. 043-221-6885 (お問い合わせ時間10:00-17:30)



【交通案内】

- ◎JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ◎千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

【編集・発行】

千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan

<http://www.ccma-net.jp>

【発行日】2008年9月13日

【印刷】半七写真印刷工業株式会社

 **千葉市美術館**
Chiba City Museum of Art